九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2020

所　　属：人文学部人文学科キャリア・イングリッシュ専攻

名　　前：　　島内　直英

作成日：2020 年 9 月 24 日

九州ルーテル学院大学　ティーチング・ポートフォリオ

教員氏名：　島内　直英
所属：人文学部　人文学科　キャリア・イングリッシュ専攻

1.　はじめに

現在私は、九州ルーテル学院大学キャリア・イングリッシュ専攻に所属している。当専攻は、全学生の英語教育を担っており、全学生に対して TOEIC、英検の資格修得の奨励と学習支援をしている。具体的には、学習サポートの教材を編集し、面接指導などをしている。また、当専攻では、TOEIC IP スコアによって習熟度別クラス編成をするので、推薦入学生の入学前教育の一貫として英語課題を作成し、推薦入学生の学習習慣の形成に努め、彼らの学力を分析し、専攻教員と情報共有している。

前職では、熊本県教育委員会高校教育課指導主事、教育センター主幹として、県立学校英語教諭に対して、学習指導要領の説明会を開催したり、実践的な指導法の開発等に参画したり、セルハイ事業の企画で学校間連携、ALT との協働事業や ICT 活用の在り方を担当した。そのため、私個人としては、主に中高英語免許関係の科目を教授するために、児童教育科等と重複する科目も担当している。この間小学校教材の開発などに関わり、小学校教諭を目指す学生にも教材を配付している。新学習指導要領導入に際し、小学校でも教科「英語」が始まることになり、2021 年からは隣接科目担当としての小学校英語も指導することになっている。

2016-2019 年の免許更新研修では、幼小中高の先生方を対象に、『これでバッチリ－教材作成のＡtoＺ』講座を担当し、あたらしい学習指導要領で英語教育に求められている改善点や、その背景に焦点をあて、英語担当・教師に求められている指導方法改善につながる授業準備の効率化と教材のデータ化の方法を具体的に紹介した。また、多様な英語経験をもたせ、アクティブ・ラーニングにつなげるためのＩＣＴの活用事例を紹介した。

２．教育の責任

英語免許取得の条件として３年前期 TOEIC500 点を最低点としており、１年次から目標未達の学生に面接指導を実施して英語力向上を奨励している。

教職関係では、中高英語免許取得に際し、教育実習が必要となっている。県外出身者や私立高等学校出身者は、熊本市内中学校での実習を希望することがあり、熊本市立中学校長会・熊本地区大学教育実習連絡協議会に参加して、受入れにあたっての申し合わせ事項の確認をしている。また、教育実施中の学校訪問については、キャリア・イングリッシュ専攻の英語教員の分担表を作成している。

2.1. 授業科目の担当

2018 年～2020 年度の３年間は以下の表の科目を担当している。

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
フレッシュマンゼミ	2018　前	12 人	必修
教職論	2018～2020　前	27 人	教職必修
英語科教育法Ⅰ	2018～2020　前	17～22 人	教職必修
英語科教育法Ⅱ	2018～2020　後	17～22 人	教職必修
英語科教育法Ⅲ	2018～2020　前	17～22 人	教職必修
英語科教育法Ⅳ	2018～2020　後	17～22 人	教職必修
英語科教育実習Ⅰ	2018～2020　前	17～22 人	教職必修
英語科教育実習Ⅱ	2018～2020　前	17～22 人	教職必修
教職実践演習	2018～2020　後	12 人	教職必修
特別研究	2018～2020　前	6～10 人	専門必修
卒業研究	2018～2020　通期	6～10 人	専門必修

■　主要担当科目

英語科教育法Ⅰ～Ⅳが一番重要な科目である。英語教育の変遷、英語教育の目指すものなどの理解から、具体的な指導方法の演習、ICT の活用などの実践的な指導を心がけている。教職論では、学習指導要領の改訂のポイントを周知するため、教育界での改革の流れなどを学ぶために、マスコミでの記事を扱っている。

学部での教育以外の教育実践は以下のようなものがある。

■　非常勤講師

①　アメリカの文化と言語Ⅰ　日本総合教育専門学校

②　大学編入論述英語　　熊本外語専門学校

■　出前講義

①玉名女子高校　英語科授業研究会

2.2. 教育組織運営

入試課と教職支援委員会に所属している。入試課においては、広報、学校訪問、学生募集、入試スケジュールなどに関わっている。教職支援委員会では、教職単位取得前半の学生との面接や支援、採用試験対策などを担当している。

３．教育の理念

英語学習は、目的と手段が不可分である。何にも増して、英語文化への興味・関心が大切である。世界と日本の状況を理解しながら知識理解を深めることで、文化や思考法の多様性への理解が進むものと思う。

グローバル化という言葉で表される、近未来の日本が内包する課題を理解・解決するために、英語教員には語学教育や語学習得のコーチング力が求められる。

3.1. 理念１　未来からの訪問者への指導法・評価研究　教材の開発

少子化にともなって、学校統廃合が急速に進展している。そのような中で、教育にも地域間格差が生じることも危惧されている。県内でも、幼稚園からの英語指導に取組む自治体も誕生している。共通する学習教材を使うことにより、小中連携にも取り組めるものと思うし、先生だけでなく高校生が絵カードを使って小学生に英語を教える活動などを通して、楽しみながら学ぶ活動もでき、将来の教員志望者も開拓できるのではないだろうか。

英語指導法を学んでいない小学校の先生たちの課題や不安がどのようなものであるか。教材の提供を通して、英語の指導方法の一助になればと考えている。また、学習到達度テストが抽出から悉皆になり、結果が公表されることが先生たちへのプレッシャーになることが想定される。英語の評価サンプルを提供することで、先生たちの指導指針に寄与できるものと考える。

3.2. 理念２　客観的な評価の研究

大学入試改革において民間試験を活用するという方向性が出てきた。大学入試が高校までの英語の学習を変えるはずという考えに基づいた改革である。冷静にみれば、すべての高校生が大学入試のために英語を学んでいるのではなく、グローバル化する世界で必要な最低限の英語を身に着ける必要がある時代になったということである。

自己肯定感の低いと言われる日本人に自信を持たせるために、可視化できる基準をつくることが望まれている。英語力測定における「書く」、「話す」能力の測定ではなく、まとまった考えを伝える「書く能力、場面を音声で適切に伝える「話す」能力には、どのような教材を、どのように段階を追って指導するかの調査が必要である

3.3. 理念３　ICT の活用・遠隔学習の可能性

昨今のウェブ環境の発展により、オンラインでの面接や試験が当たり前となりつつあ

る。２０１９年の調査では、大企業の４社に１社が AI を使って面接試験を実施しているとの報道もあった。

これまで、「読む」・「聞く」テストにとどまっていた英語検定でも、IT 機器を使ったコミュニケーション能力テストが実施されるようになった。特に、「話す」「書く」能力も PC を通じて個別実施し、映像記録を使って採点することも進んできた。

２０２０年におこったコロナ感染症への対策として、小中高では、対面教育から IT を駆使した遠隔授業の試みが始まっている。さまざまなソフトを駆使して取り組まれているが、教材の作成に戸惑っていることが課題として挙げられている。

教材の効率的な作成化を研究し、教材の共有化による学校間連携を支援する取り組みを続けたい。

4．教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

4.1. 最新の教育理論・授業実践の修得

私の専門は英文学であり、英米の文学や文化について興味関心をもっている。

現場主義を大切にしており、教育の場面での変化をできるだけ踏まえた授業を心掛けている

4.2. 授業アンケートの活用

英語関係の教員間で、学生の英語力向上の在り方を検討していきたい。学生の目標と学習実態との乖離を無くすために、学生のアンケートに対して適切な授業改善に取組みたい。

4.3 教育実践の振り返りと論文の執筆

自分の研究の成果や成果は、学生に共有することにしている。その新 たな実践を振り返り、教育論文もしくは著書の形で発表することにしている。以下は、その一例で ある。

■英語教育に関する論文：

①「高大接続を考えた英語教育についての考察」
2014 年 VISIO、No44、67-76　著者; 島内直英

②「コミュニケーションから考える作文指導の在り方」
2015 年 VISIO、No45、97-107 著者; 島内直英

③「小学校英語における教材についての考察」
2017 年 VISIO、No47、137-147　著者; 島内直英

④「熊本県における高等学校英語ディベートの取り組みの歴史と今後の展望」
2019 年 VISIO、No49、89-100　著者; 島内直英、中田智子
⑤「到達目標の可視化による英語力向上の取組み」
2020 年 VISIO、No50、(出版予定)　著者; 島内直英

5．教育改善のための努力

5.1. 改善努力１　授業評価アンケートと授業改善報告書

主にキャリア・イングリッシュ専攻学生の資格取得のための補助教材を作成し、学力向上に努めた。また ICT を活用をした教材提供を 2015 年から何時でも閲覧できるようにしている。いかにして、利用しやすく、点検できるかの方策を考えたい。

5.2. 改善努力２　フロンティア・ランナーの育成

「英語科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「英語科教育実習Ⅰ・Ⅱ」では、英語教育改革の内容と目的とを、英語教師を目指す大学生に認識させることに務めた。英語教育実習Ⅲ・Ⅳでは、系統だった指導方法の実践に勤めた。また、ICT の実践的な活用の仕方も指導している。

6.　教育の成果・評価

できるだけ実践的な教授法の紹介と演習を大切にしている。同時に、英語教師になるための資質を育成している。2018 年 1 人、2019 年 2 人が教壇に立つという成果を出している。

7．今後の教育に関する課題と目標

受講生が増えており、演習の機会が十分確保できていない。小学校・中学校・高校との校種を越えた連携の在り方を把握することが課題である。

8. 参考資料

（1）担当科目シラバス

科目名			担当者		
英語科教育法Ⅰ			島内　直英		
授業科目名：英	English Teaching Methodology　Ⅰ				
開講学科(専攻)	学年	必修･選択別	授業形態	単位数	開講時期
学科共通	3 年	教職必修	講義	2	前期

授業の概要	授業計画				
小学校、中学校、高等学校の英語科教員に必要な、第二言語習得理論の基礎・基本や新教	週	テーマ	講義内容	事前学修	事後学修
	1	オリエンテーション	授業の目標。学習指導要領の意義。	教科書の冒頭部を読んでおく	課題 1 を解く

育課程の目標とその背景を学ぶ。具体的な授業内容は以下のとおり。 1．英語教育史を俯瞰し、第二言語習得の基礎的な知識を紹介する。 2．生徒の学習意欲を喚起することの大切さと方法論を学ぶ。 3．自分なりの英語学習方法と指導方法を	2	日本の英語教育（1）	英語指導法の必要性の歴史的背景。	本時の該当部分を読んでおく	課題２を解く
	3	日本の英語教育（2）	英語指導法の実際と課題。	本時の該当部分を読んでおく	課題３を解く
	4	学習意欲とは	学習意欲が向上する秘訣。	本時の該当部分を読んでおく	課題４を解く
	5	アンケートから見た生徒の学習意欲	学習者の心理。	本時の該当部分を読んでおく	課題５を解く
到達目標 1．現在の日本が求める英語教育への期待を認識できる。 2．小・中・高・大・社会人の連携を理解したうえで、指導方法や目標を自ら考えることができる。 3．自分の英語学習を顧み、社会の期待に応える学習者とな	6	学習意欲に影響を持つ要因	意欲向上の方策。	本時の該当部分を読んでおく	課題６を解く
	7	生徒の学習意欲を促進する教師の在り方	教師の研鑽。	本時の該当部分を読んでおく	課題７を解く
	8	生徒の学習意欲を促進する授業の工夫	有効な指導工夫。	本時の該当部分を読んでおく	課題８を解く
	9	ＡＬＴ制度の創設	ＡＬＴの存在意義。	本時の該当部分を読んでおく	課題９を解く
履修の留意事項 教職につく志望を持ち、講義で学んだことを活用する意欲をもつこと。	10	ＡＬＴの活用方法	ネイティブの有用性。	本時の該当部分を読んでおく	課題１０を解く
	11	セルハイ事業の創設	セルハイのもたらした影響。	本時の該当部分を読んでおく	課題１１を解く
	12	セルハイ事業の成果	各学校で活かせる指導法。	本時の該当部分を読んでおく	課題１２を解く
教科書 小池生夫編『提言日本の英語教育－ガラパゴスからの脱出』光村図書	13	学校間連携の可能性	円滑な校種間の移動。	本時の該当部分を読んでおく	課題１３を解く
	14	指導方法改善のための教材	新しい学習方法の調査。	本時の該当部分を読んでおく	課題１４を解く
参考図書 「小学校学習指導要領解説外国語活動編」「中学校学習指導要領解説外国語活動編」「高等学校学習指導要領解説外国語活動編」	15	日本の英語教育への提言	自分ができることの考察。	本時の該当部分を読んでおく	レポート
	16				

成績評価基準

評価方法	割合（%）	評価のポイント
平常点（態度・行動観察）	30	積極的な授業態度
課題／レポート	30	授業内容の理解度
	40	授業内容の理解に基づいたレポート作成能力

（2）授業評価アンケート結果

ｺｰﾄﾞ 115001

科目担当者：　島内　直英
調査対象科目：　英語科教育法Ⅰ　　ｸﾗｽ：　3T

授業科目：　**教職に関する科目**
単位数：　**2**　単位　　調査日：　**2017年7月31日**　，　**月**　曜日，　**3**　時限
必修・選択：**教職必修**　　履修者数：　**13**　人　（2017年5月12日現在）
授業形態：　**講義**　　回答者数：　**12**　人
開講期：　**前期**
配当年次：　**3**　年次

【改善計画】（400字以内）

1．自己評価

シラバスに沿って、今後の志望達成に必要な情報や指導法を提供した。教科力をつけるため英作文や採用試験問題などを使って、教師に求められる英語力の育成に努めた。受講生が多かったが、受講意識に欠ける学生がいた。

2．改善課題

教材については、具体的な実践力の育成にも役立つ教科書を使って、実践に活用することを優先した。事前・事後学習については、あまり徹底できなかった。課題問題の活用を検討したい。

3．改善計画

教材については、目的をしっかりと認識させ、動画の活用も含め教材や課題については充分に提供できたと考えている。自己実現に必要な科目であるので、今後さらに自主性を引き出すようにしたい。

質問項目

1. 授業に対するあなた自身の取り組みについて

①この授業にどの程度出席しましたか
②『講義概要（シラバス）』に事前学修・事後学修が記載されていることを知っていますか
③授業１回当たりの事前学修・事後学修の合計時間は平均するとどのくらいでしたか
④事前学修・事後学修によって、授業の理解は進みましたか
⑤事前学修・事後学修によって、授業への参加意欲は高まりましたか
⑥授業の到達目標について、目標は達成できましたか

集計結果

①

毎回出席	9
1～3回欠席	3
4回以上欠席	0
誤記入	0
合計	12

②

はい	11
いいえ	0
誤記入	1
合計	12

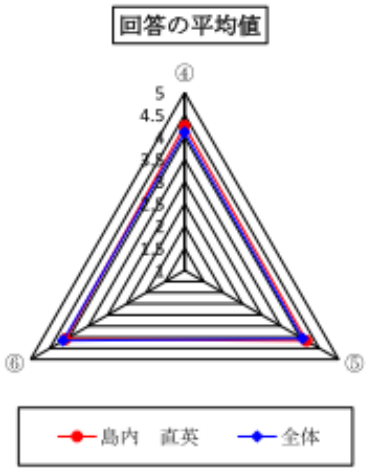
③

120分以上	0
60分～120分	0
30分～60分	7
ほとんどやっていない	5
誤記入	0
合計	12

④～⑥　※平均値は誤記入の個数を除いて算出しています。

五段階評価	④	⑤	⑥
5	5	4	4
4	5	6	4
3	2	2	3
2	0	0	0
1	0	0	0
誤記入	0	0	1
合計（個数）	12	12	12
合計（点数）	51	50	45

平均値	④	⑤	⑥
島内　直英	4.3	4.2	4.1
全体	4.1	4.1	4.2

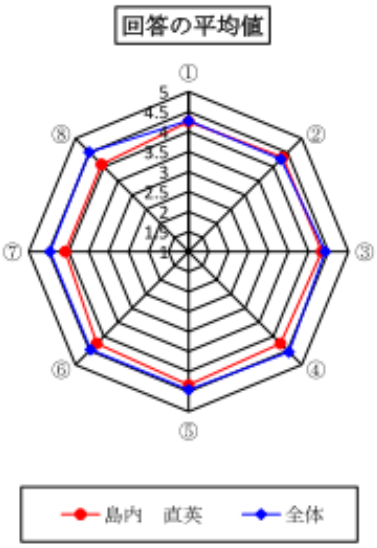


質問項目

2. 授業について

①事前学修・事後学修についての説明は十分でしたか
②事前学修・事後学修の課題は授業に有効でしたか
③授業は『講義概要（シラバス）』に沿って実施されましたか
④授業で、先生の熱意や意欲は感じられましたか
⑤先生は、授業をわかりやすくする工夫をしていましたか
⑥質問した時に、適切に答えてもらいましたか
⑦授業中は勉強に集中できる雰囲気でしたか
⑧全体として、この授業は有意義でしたか

集計結果　※平均値は誤記入の個数を除いて算出しています。

五段階評価	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
5	5	5	6	6	6	5	4	5
4	5	6	4	3	4	5	5	3
3	2	1	2	3	2	2	3	4
2	0	0	0	0	0	0	0	0
1	0	0	0	0	0	0	0	0
誤記入	0	0	0	0	0	0	0	0
合計（個数）	12	12	12	12	12	12	12	12
合計（点数）	51	52	52	51	52	51	49	49

平均値	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
島内　直英	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.1	4.1
全体	4.3	4.3	4.4	4.6	4.5	4.5	4.5	4.5